



小さなたねの物語が描かれたスタンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）

たねナースのつぶやき

我が家の次女、きいさん。最近、ベリーショートヘアにしてみました（実際は、ほぼ坊主です）。色々な方に、「どうしてー、女の子なのに!!」と言われます。なぜかと言うと、髪を抜いて髪を、糸ようじ、にするのがマイブームでして、両親は泣く泣く坊主に……(▽)△

髪を抜く癖のあるお子さんのいる方、いらっしやいませんか？ みなさん、何かいい対策があったら教えてください。（羽太）



ライフワーク

所長 水野 英尚

このたびノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇氏は、半世紀にわたる研究を振り返りながら「若い人たちには、好きなことをやりなさいと言いたい」と語りました。一つの目標に向かって取り組み続けた人の言葉として、多くの示唆を与えてくれます。彼のように、人が一生の仕事として人生を捧げていくことを「ライフワーク」と言います。しかし、多くの人たちは、そのような研究者とは違い、仕事とは生活していくための糧を得るものであって、生涯をかけるなんていうことはナンセンスだと考えているのではないのでしょうか。「終身雇用」が崩壊している現代社会では、会社や仕事に生涯を捧げることなど、意味をなさないことと捉えられているようです。

ところがしかし、「ライフワーク」をもう少し違った視点から見ること、その人の人生がより豊かになり、人生に意味を与えることができるのです。言語学者の外山滋比古氏は、「どんなに貧

後記

「小さい頃は神様がいて、毎日愛を届けてくれた」。そんな日を過ごさせてあげるはずだったのに…。こども病院の待合室のテレビで流れる『魔女の宅急便』の挿入歌が、いつも胸に刺さった。検査室からは、生後数カ月の息子の泣き声が聞こえてくる。愛を届けるどころか、何も分からないまま手術や検査が繰り返された。あれからもうすぐ13年がたつ。胸の痛さは忘れようがないけれど、今は「やさしさに包まれたならきっと目に映る全てのものはメッセージ」の歌詞に前向きな力を得ています。（E）



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林6-23-3
電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
E-mail: chisanatane@tune.ocn.jp
ブログ: <http://chisanatanetane.blog.ocn.ne.jp/blog/>



「寄せ植え体験」でハイ！ チーズ!!

限界状況の中で

三歳ぐらいの幼児に、「将来何になりたい?」と尋ねると、「パイロットになりたい」「アイドルになりたい」「医者になりたい」等々、屈託の無い笑顔で自由に語るその姿は実に誇らしげです。ところが、同じ質問を就活中の大学生にすると、幼い頃抱いていた「夢」ははたなく消えて、より「現実」に近い答えが返ってきます。それは、自らの「限界?」(努力が足りなかった、あるいはしなかったともいえますが……)を知るということでしょう。

また、戦時中のように時代が有無を言わず強制的に人間を限界に押しやることだってあります。生死を分ける究極の「限界状況」の中で、人はどのように過ごすのかをテーマに、心理学者のビクトル・フランクルは、第二次世界大戦時のナチスによるアウシュビッツ強制収容所での、自身の捕虜となった体験を描いた『夜と霧』で、極限の「限界状況」を生き抜く人間の姿を描いています。そこには、人間性を失った人間が、こんなにも残酷になれるものかと心がスシリと重くなりつつも、もう一方で、

希望を失わずにいれば、たとえそれがどんな状況であれ生き抜く人間の姿があります。

そのような極めて特殊な「限界状況」

までとはいかなくとも、もっと身近な場所に、どんなに努力や忍耐をもって過ごしていても、この肉体をもつがゆえの「限界」というものがあります。つまり、老いるということであったり、末期のガンのような病でもあります。そのとき人は、無力さの中でどうすることもできない「限界」を知らされるのです。それは、誰にとっても望まない状況でありますし、進んでそうなりたく願うようなことでもありません。しかし確実に、誰も例外なく私たちに迫ってくる「限界状況」だと言えます。

小さなたねに集う重い障がいのある子どもたちの多くは、その誕生の時から懸命に生きています。そこにもま

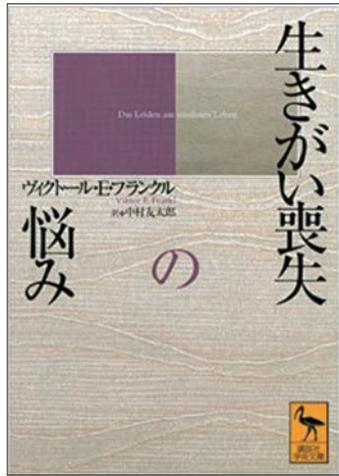


本の紹介

『生きがい喪失の悩み』

ヴィクトール-E-フランクル 著
中村友太郎 訳
(講談社学術文庫、税込880円+税)

平穏無事な日常生活の中で「生きることの意味」を考えるようなことは、ほとんどないことでしょう。しかし、何の前触れもなく、突如としてやってくる「人生の嵐」に遭遇した時、人は「生きる意味」を考えるのではないのでしょうか。



『「もう疲れたよ…」にきく8つの習慣』

働く人のためのアドラー心理学』

岩井俊憲 著
(朝日新聞出版、本体1300円+税)

人間関係での悩みを抱える人は多いと思います。少し視点を変えることで、悩みを軽減することができます。そんな「ツール」(心理学)を持つことも必要です。



書けと言われて
書いています

たねのスタコラ

7月の通信で、七夕の夜にまるで彦星、のように帰ってきて在宅生活を始めた主人のことを書いた。今回は、その後の彦星のこと。

「頑張り過ぎない介護」のコンセプトのもと、退院翌日からショートステイに行ってもらっていたが、10日後に「誤嚥性肺炎、で緊急入院となった。何年も安定していたので、信じられない気持ちで仕事を早退し病院へ。手厚い治療のお陰で2週間後には自宅療養できる状態に回復したが、長年の喫煙が災いして肺気腫が進み酸素と吸引が必要となり、まさかの24時間誰かがついていないといけない状態になった。医療的ケア（吸引など）ができるヘルパーさんの手配も簡単でなく、私は仕事がありこのまますぐに在宅に戻ることは難しいと判断し、入院先の病院のソーシャルワーカーさんに、転院先を探して頂きたい旨を相談した（ここからが大変だった……）。

「こんな重度の障がい者を受け入れてくれる所はどこにもない！在宅前の病院に戻るしかない」「そんな軽い考え方で在宅したのですか？」「もっと勉強してもらわなければ困る！」等々、2人の担当者から厳しい言葉を次々に畳み掛けられ、あふれる涙を抑えることができなかった。同時に、これが重度障がい者を取り巻く現状なんだと思ひ知らされた。結局は今、近所の総合病院に転院することができた。

「とにかくやってみないと分からない、という前提で始めた在宅介護だったが、2年間寝たきりで還暦目前の主人が環境の変化に適應することは、考えていた以上に容易ではなかった。病室にいる主人を訪ねると、私を見るなり、上手くコントロールできない腕で殴りかかろうとしたり、ツバを吐きかける仕草をするようになった（言葉を発することができない主人の真意は分からない……）。

今回、在宅をするにあたり力になって下さった沢山の方々に心から感謝しつつ、しばらくは時の流れに身を任せ、主人の体調と自分の気持ちを落ち着かせることにしようと思う。再び、在宅介護へのモチベーションがむくむくと湧き上がってくるその時まで。

その後の彦星



羽原美佐代（看護師）

彦星 58歳、182cm、54kg
仕事中のガス漏れ事故で全身マヒとなり寝たきり状態（12年目）。構音障害でコミュニケーションが取り難い。胃ろう栄養。

た、「限界状況」があります。しかし、その生きる姿は力強さに溢れ、いの中の輝きに満ちているように思えます。その状況の中で、彼（女）たちの一瞬の笑顔であったり、かすかな声であったり、黙る中での「凜」とした姿であったり、「限界状況」に置かれたものだけに示すことができる、人間の尊厳がそこにあります。それを教えられ学ぶことで、やがて自らも「限界状況」の置かれた時、尊厳あるいのちを輝かすことができるのだと思います。

先のピクトル・フランクがこう書いています。

「一つの未来を、彼自身の未来を信ずることのできなかった人間は収容所で滅亡して行った。未来を失うと共に彼はそのよりどころを失い、内的に崩壊し身体的にも心理的にも転落したのであった」（『夜と霧』より）
重い障がいを負って生きる子どもたちもまた、自らの未来を信じて生きていくのだと、私は思います。



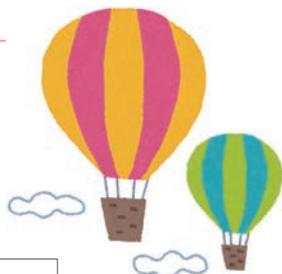
一緒に「お菓子作り」。どんな「未来」を描くかな？

でしょうか。自らの力で身体を動かすことも、食事することも、排せつの処理もできない彼（女）たちが見ている「未来」とは、どのようなのでしょうか。
それは、他者と共に描く「未来」です。つまり、自分ではどうすることもできない、動かしがたい目の前の現実であっても、そこに信頼する他者がいて、身体の向きを変えてもらった、手を握り話しかけてくれた、そういう些細なことであっても、それが今の状況を小さく変えていくことができる。その「未来」を常に信じ忍耐強く生きる。それが、「限界状況」に置かれた重い障がいのある方たちの、一日一日の生き方だと思っております。

やがて誰のところにも到来するであろう「限界状況」の中で、どう生きるべきかを、その姿から学んでいきたいと思えます。共に「未来」を信じて、歩み続けるものでありたいのです。豊かな「未来」は、そのように創り上げていくことなのでしょう。

意見公募
11/14まで

どしどし意見を出しましょう!



「第4期福岡市障がい福祉計画（素案）」

地域に必要な福祉サービスが提供できるように、計画を立てることが義務付けられています。それが「福岡市障がい福祉計画」です。

その「素案」が公開され、パブリックコメント（市民の意見）の募集がはじまっています。

意見募集期間は、平成26年10月14日～11月14日。下記へ郵送・FAX・メール、または行政窓口等へ提出することになっています。

「些細なことだから……」「どうせ言っても無駄……」とあきらめずに、どしどし意見を出すべきだと思います。

今回の第4期に、私はこの計画を精査する「障がい者保健福祉専門分科会」に委員として参加させていただき、私なりに気づいたこと、不足していること等々、意見を述べさせていただきました。それが十分反映されているとは言い難いのですが、それでも粘り強く訴えることが大切です。今回のような市民に意見公募する機会もまた、有効に活用することが必要だと思います。

【意見送付・問い合わせ先】

〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1

福岡市保健福祉局障がい者在宅支援課

TEL：092-411-4248 FAX：092-711-4818

メール：zaitakushien.PHWB@city.fukuoka.lg.jp

「音」で繋がるコミュニケーション

たね
日記



大きな太鼓や小さな太鼓、トーンチャイム、電子ピアノ等々、いつも、よいしょよいしょと沢山の楽器を抱えて小さなたねを訪ねてくれる音楽療法士の野田恵美さん。

楽器の音色が鳴り響くと、子どもたちが興味津々の目になります。

自らで動くことのできない人も介助者と一緒に鳴らすことで、楽しい時間を共有できます。

いつも最後に演奏して下さるオカリナの音色は、その場が優しさに包まれる瞬間です。

次回の予定は、

11月14日（金）13時～14時です。

